

Title	<書評>八木絵香（著）『続・対話の場をデザインする：安全な社会をつくるために必要なこと』
Author(s)	矢守, 克也
Citation	災害と共生. 2020, 4(1), p. 143-152
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77184
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

八木絵香（著）『続・対話の場をデザインする：安全な社会をつくるために必要なこと』
大阪大学出版会，2019年4月刊，254頁

矢守克也¹

Katsuya Yamori

1. 年表と人物相関図——骨太のアクションリサーチ

今年2020年4月25日、JR福知山線列車事故は発生から15年目のその日を迎えた。

本書の末尾に年表が掲げられている。その表題は「本書の内容に関連するJR西日本、空色の会を中心とした出来事」である。また、最終章には、「本書におけるさまざまな対話の位置づけ」と題された図が提示されている。そこには、「負傷者とその家族」、「2.5人称の視点をもつ被害者」、「事故検証を担う専門家」、「他公共交通事故の被害者」、「加害企業に属する人々」という人物クラスターとその相互関係が描かれている。浩瀚な大河小説の付録として登場しそうな2つのイラストレーションが、JR福知山線列車事故、特に、事故による負傷者（その家族）が結成した「空色の会」について扱った本書が、本格的でかつ骨太のアクションリサーチの成果であることを物語っている。

年表は、2005年4月25日に発生したこの事故よりも以前、1985年の日航機墜落事故に始まり、1991年の信楽高原鉄道事故、そして、本事故の発生を経て、2010年1月の「八木（筆者）が空色の会の定例会で講演」との記述をはさんで、本書の刊行直前の2019年まで続いている。事故発生から15年、事故の直接的関係者（「空色の会」のメンバーやJR西日本の社員ら）との最初の出会い（2009年末）から数えても10年にわたって、筆者は、この悲惨な事故の関係者たちと関わりをもち続けた。なお、本事故以前にさかのぼって年表が作成されている意味は、3節(3)項で触れることになる。

10年という時間の中での関わりは、「時間の経過とともに、つどうメンバーが少なくなったり…（中略）…ただ長い時間が過ぎていく中で…（中略）…結婚して子どもが生まれて、今度は伴侶や子供と一緒に参加してくれる人がいたり」（本書p.96、以降、ページ数のみを示す）など、「負傷者（の家族）」が、そのレットルとは別に、ふつうの人びとと同様の生活・人生を歩んでいる一面をもつ——このあた

りまえの事実を（とりわけ、研究者が）再認識するのに十分な時間でもある。評者自身、阪神・淡路大震災の被災者が結成した語り部の会で20年にわたって続けてきたアクションリサーチを通して、このことの重要性を痛感するだけに（矢守, 2018a）、同時に、防災教育の成果検証を素材に、ワンショットで終息する安直な研究の粗製濫造を批判してきただけに（千々和・矢守, 2020）、この研究がもつ長大な時間的スパンをまず高く評価したい。

他方、相関図の方は、筆者（八木氏）の本事故との関わりが単に長期間にわたっているだけでなく、決してなま易しいものではなかったことを暗示している。先に示した5つの人物クラスター間には、空前の鉄道事故という対象事象の性質上、部分的な共同・協力関係とともにではあるが、基本的には、非常に厳しい対立・葛藤関係が存在するだろう。しかも、5つのクラスターはあくまで主要な関係者群であって、その周囲には、たとえば、「犠牲者と遺族」といった別の、きわめて重要なクラスターが存在し、加えて、便宜的にひと括りにされたクラスターの内部にも確執・不和は存在する。筆者は、そのように複雑で、とても容易に解きほぐせそうにない関係性の中に、こともあろうに「媒介の専門家」（本書最終章の表題にもなっている）として飛び込んだことになる。その平坦であるはずのない10年に及ぶアクションリサーチの記録、それが本書である。

「媒介の専門家」は、本書の中心テーマでもあるので5節で詳述するとして、ここでは、以降の議論の前提として、事故関係者と筆者（八木氏）の関わり方に認められる明瞭な特徴をまずおさえておこう。それは、多様な関係者クラスターの「すべて」と——（等）距離をおくという安全だけど陳腐な戦術ではなく——密接かつ真摯に関与するという、きわめて労力を要する姿勢である。本書を読み進めていくと、筆者が、この姿勢を保つべく、言いかえると、特定のクラスターとだけ距離を置いたり、あるいは、特定のクラスターから排除されたりすることのないよう腐心していることがわかる。これは、大変困難で

*1 京都大学防災研究所 教授・博士（人間科学）

Professor, Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University, Dr. Human Sciences

辛い作業である。「思考を空にして対話の場に臨むことは、重要であると同時に途方もなく難しい」（p.230）、「両方から揺さぶられる」（p.230）、「自らがその立場にたった場合を想像しても、相反する意見であるにもかかわらず、『どちらの言っていることもわかる』と感じてしまう」（p.232）といったフレーズに、筆者の苦渋があらわれている。人間だから好き嫌いはあるだろうし、どちらかにはっきり軍配を上げたくなくなった瞬間もあつただろうと想像する。筆者はこうした葛藤や苦悩を率直に告白しつつ、ときに相容れない見解を厳しく対峙させる関係者たちそれぞれの言い分や思いを、慎重で抑制された筆致で描きだしていく。

2. 被害者・被災者間の「線引き」

本書で主役の位置を占めるのは、「空色の会」である。そのことは、本書の美しいカバーに筆者の意向で空色が使われていることからわかる。「空色の会の特徴は、何よりも『負傷者』とその家族等の会であるということである」（p.13）。負傷者と聞くと、だれしも、「それよりも」という印象をもつはずだ。すなわち、負傷者よりも事故の犠牲者やその家族（遺族）の方について大きな注意を向けたいだろう。いや、他のだれよりもその点に敏感にならざるをえない人たちこそ、負傷者やその家族だと言える。実際、本書の前半部には、犠牲者や遺族に痛いほど繊細に気を配りながら、自分たち負傷者やその家族の集まりを立ち上げていった当事者たちの言葉がいくつも紹介されている。「事故から5年が過ぎる頃になってやっと、自らも被害者だと考えてもいいのかも思えるようになった…（中略）…しかしそんなEさんでも、折に触れて、思い出したように『やはり、ご遺族の前では（自分たち負傷者にもつらいことがあるなどとは）言えない』という言葉を繰り返す」（p.15）。

「ご遺族と比べると私たち（負傷者）は…」——この種の感情や感覚はよく理解できるものである。その上で、災害や事故における被害・被災程度の大小や種類等に基づく、当事者自身（あるいは、周囲の関係者）による被災者や被害者の間の類型化や序列化のことを、本稿では、仮に「線引き」というワードで総称しておく。精神科医師の宮地尚子氏が用いる（被災や被害の程度に関する）「重さ比べ」も同様の事象を指している（東京都人権センター、2011）。ただし、ここで、「線引き」の存在自体は、常識の範疇に属することは指摘しておかねばならな

い。特に、「線引き」が、何らかの「中心—周辺軸」——たとえば、「東北三県と比べて茨城・千葉は…」、「東北三県でも特に福島は…」、「自宅が全壊・全失した人たちはそうでない人と比べて…」——に沿って「線引き」が生じるとの指摘は、個別具体の社会問題の解決にとっては重要であるとしても、学術的な知見としては旧聞に属する。

言いかえれば、「線引き」についてアカデミックな意味で真に検討に値する知見は、「中心—周辺軸」に沿った「線引き」がなされがちだとの常識を踏まえて、さらにその先に何を見いだすかにかかっている。評者は、主に二つのことが重要だと考えていて、本書は、そのうち2番目の論点と密接に関連する重要なことを示唆している。節をあらためて、その第2点について詳しく述べる前に、まず、第1の論点について簡単におさえておこう。それは、「周辺」をより幅広にとらえることである。なぜなら、「線引き」については、「周辺」とされる端点の方を、思い切って拡大・延長してみる作業が、特に実践面で鍵になることが多いからである。そうした作業は、当該の事故や災害の伝承や継承について新しい境地を拓く観点から、あるいは、当該の被害・被災の「責任」の帰属に関する旧来の社会的慣行を見直す観点から、重要な役割を果たすケースが多い。

関連する具体的な試みとしては、発災時に母親の胎内にあった人たちは被災者なのかと問うた実践「Die Kindheit in Kobe」の問題提起（笠原・寺田、2009）、被爆2世、3世はどのような意味で被爆者なのか（被爆者だと自己認識しうるのか）をめぐる膨大な研究蓄積、さらに、戦後世代は戦争責任を担いうるのかをめぐる広範な論争を巻き起こした「敗戦後論」（加藤、2015）など、が重要であろう。なお、この論点については、評者自身も、上述の震災語り部メンバーによる「私に語る資格があるのでしょうか」という自問自答に触発されて書いた論考（矢守・杉山、2016）、1995年1月17日生まれのある青年の葛藤（自分の誕生日についてどう語ればいいのか）と成長を追跡した研究（船木・矢守、準備中）などを通して愚見を提示してきたので参照されたい。

3. 「線引き」がもつ極端な両義性

3.1. 頑強かつ脆弱な「線引き」

「線引き」には極端な両義性があること、この点を理解することが死活的に重要である。ここで言う両義性とは、「線引き」によって分割された両側を隔てる溝は、一方で、この上なく深く、およそ架橋

不可能な深刻なギャップだと認識されているが、他方で、その同じ溝は、これ以上ないほどに浅く、両側がいつも簡単に入れ替わってしまうとも認識されている——このような両義性である。結論を先に記せば、本書に収められた貴重なエスノグラフィーには、この意味での両義性が鋭くかつ的確に指摘されており、加えて、実は、この両義性こそが、「媒介の専門家はいかにあるべきか」という本書の中核的な問いに対する回答と深く関わっている(5節参照)。

まず、「線引き」の両義性を、本書の主役たる「空色の会」のメンバーと遺族との間のラインを例にして具体的におさえておこう。「線引き」が非常に強固であることは、一般にも理解しやすい。2節で紹介した「やはり、ご遺族の前では(自分たち負傷者にもつらいことがあるなどとは)言えない」という負傷者の躊躇や逡巡も「線引き」を強く意識してのものだ。ラインのあちら側の遺族の方々は、こちら側の私たちとはまったく異なるという思いである。一般化して表現すれば、家族を亡くした被災者、家を失った被災者、仕事を失った被災者、長期間仮設住宅で暮らした被災者……そして、一時的にライフラインが停止して一晩避難所暮らしを余儀なくされただけの自分たち——こういった「中心一周辺軸」上で「線引き」された各群間で生じる「異なり」の感覚も相当に執拗で手強いことを私たちは知っている。

本書には、「線引き」の頑強さを別の角度から示す事例も紹介されている。それは、「線引き」の結果として一つの閉じた内側を形成するかに思われる負傷者(その家族)というクラスターの内部——本書p.64には、この内部性を象徴する言葉として「事故友」なる表現も紹介されている——にも、いつも簡単に「線引き」が追加されうるという事実である。

「同じように見えてまったく異なる」(p.86)というわけである。たとえば、「時間の経過とともに、つどうメンバーが少なく」(1節)に見られる通り、「空色の会」のメンバーの間にすら、時がもたらす事情の変化とともに亀裂(「線引き」)が入る場合もある。これは、災害の被災者にもしばしば認められることだが、事故の被害者特有の現象として、「示談」(p.51など)の進捗状況の相違がもたらす分裂や、「被害者根性」(p.111)を剥き出しにする被害者とそれには肯定的でない被害者との間の異和なども、さらにここに加わる。

これに対して、「線引き」が非常に脆弱であるこ

と、別言すれば、分割線によって遙か遠くに隔てられたかに見える群間の距離・落差が、実際には皆無であると当事者によって自覚される場合があることについては、少し丁寧な説明が必要であろう。実は、本書には、この重要なポイントを実感できる記述が満載されている。「Eさんは『負傷者』の親ではなく、『遺族になるかもしれなかった』人であった」(p.29)、「事故当日、息子の姿が新聞に載っていたんですよ。(新聞の写真を示しながら)。こういうのを見るとね。やっぱり一歩間違えればという気持ちがね」

(p.62; 傍点は原著者)、「本当にご遺族との差は、本当に寸差で、うちは三両目に乗っていたから本当にもう…」(p.63; 傍点は原著者)。こういった言葉はいずれも、彼我の間、つまり、我ら負傷者(その家族)と彼ら犠牲者(その遺族)との間に、巨大な落差があることを感じつつも、それと同時に、その間が容易に反転してしまっていた可能性——たまたまそのように「線引き」されたに過ぎず、彼が我に、我が彼になっていてもまったく不思議ではなかったという偶有性(コンティンジェンシー)の感覚——が強烈に意識されていることを示している。

3.2. 非常時と日常時の連続性

以上に述べた「線引き」をめぐる極端な両義性は、事故や災害といった特殊な事象にだけ相関してあらわれる特別な現象だとの印象を抱く向きがあるかもしれない。その印象は、半分は正しいが、半分は誤りである。なぜなら、ここで問題にしているような「線引き」は、「この学校ではなく、あの学校に進学していれば」、「あそこで偶然彼女と出会っていなければ」、「もう10分早く退社していれば」など、濃淡・大小さまざまな形で日常生活でも無数に生じているからである。私たちが、それをさして気にとめないのは、また、「線引き」の極端な両義性を意識せずに済んでいるのは、通常は、「線引き」の帰結に関する目に見える落差は多くの「線引き」が重なりあった結果としてしか生じず、一つ一つの「線引き」の存在感や重大性が希薄化されているからにすぎない。

裏を返せば、事故や災害という事象は、現実には、日常の暮らしにも遍く存在している「線引き」やその両義性をだれの目にも知覚可能なかたちで見せるための拡大鏡のようなものである。この論点は、たとえば、著名なところでは、富山(2006)の『戦場

の記憶』（わずか数十センチ脇にいた戦友は敵兵の銃弾に斃れたが自分は生き残った）、大澤（2018）の『責任論』（阪神・淡路大震災で、起床のわずかな時間差が生死を分けた夫婦）などを通して、つとに指摘されてきた。私たちの日常を構成する、それ自体平凡な出来事に生じる時間・空間上の微細な差異、しかも、当事者の意識や制御の外側にある——つまり、偶然として定位せざるをえないような——微細な差異は、ときに、とてつもなく大きな落差を帰結する。その極限に、自分の生死や大切な人の生死という「線引き」が置かれている。そのような形で突如日常世界に侵入してくる出来事——そうした出来事のことを、通常、私たちは事故や災害と定義している。

3.3. 遠隔間でも生じる互換・反転

「線引き」の両義性について、もう一つどうしても外せない重要な論点がある。それは、両義性の片翼をなす偶有性（コンティンジェンシー）、つまり、彼我が容易に互換・反転してしまう現象は、けっして、「中心—周辺軸」上で、近接した位置にある人びとの間に限定されるわけではなく、見かけ上、何本もの「線引き」を挟んで非常に遠く隔絶した位置にあると思える人びとの間でも生じうる、ということである。（別言すれば、近接した位置にある彼我の間の「線引き」がゆるいわけでもない。）

このきわめて重要なポイントを証拠だてるエビデンスも、本書に多数提供されている。最初の事例は、負傷者（その家族）と、幸い無傷でその後もほとんど何ごともなく済んだ（と思われる）人びとの間に引かれた「線引き」がもつ両義性である。この「線引き」の両サイドの落差は、もちろん、きわめて大きい。負傷者やその家族は塗炭の苦しみを背負って生きているのだから（そうでない人たちも悲惨な光景を目にしたことがもたらした苦しみに苛まれてきたこともまた本書は見逃してはいないが）。しかし他方で、「もし、あの時、声をかけていたら、あの電車には乗っていなかったのではないか」（p.85）、「もし、進学に際して、別の大学を進めていれば」（p.85；原文ママ）など、負傷した家族が「線引き」の反対サイド、つまり何ごともしなかった側に、——容易になしえたはずの行為を通して——いとも簡単に降り立つこともできたとの感覚が、負傷者やその家族にはどこまでもついてまわる。なお、この紙一重を作った原因を自らに帰属させる傾向性は、通常、生存者の自責・自罰感情（サバイバーズギルト）と呼ばれる。

負傷者や家族に定位したとき、「中心—周辺軸」上で、上で述べた種類の人びと、たとえば、たまたま後方の車両に乗ったので大難は免れた人たちとの距離よりも、さらに遠方に位置すると思われるのが、この列車事故とおよそ無関係だと思われる一般の人びとである。そうした完全なる「無関係者」と負傷者との距離は、最高度に遠いと思える。その間には、「中心—周辺軸」のスケールに沿って無数の「線引き」が介在しているように思える。しかし、実際にはそうではないこと、言いかえれば、両者の距離は遠くて近いことを示す根拠もまた本書にいくつか提示されている。中でも評者の注意を引いたのは、事故現場に近いJR尼崎駅で、4月25日前後に「空色の会」が毎年実施している「空色の葉」（事故の風化・再発防止への願いの言葉が書かれている）の配布活動とそれに対する通行人たちのリアクションである。「この葉づくりだけはやめたくないから、会に残っている」（p.13）とのメンバーの言葉通り、この活動は「空色の会」にとってきわめて大切な意味をもつ。

しかし、配布活動では、あたたかい声をかけてくれる人びとと同時に、「こちらを見ないふりして通り過ぎる人、手渡そうとするとさっと方向転換する人、渡そうとした葉を邪険に手で振り払う人もいる」（p.12-13）。こうしたリアクションに、「空色の会」のメンバーは心を痛めたことであろう。自分たちとこうした「無関係者」との間の「線引き」の強さを痛感したであろう。しかし、それと同時に、評者は次のようにも推測する。きっと「空色の会」のメンバーたちは、こうも感じたはずだ。「この人たちは、かつての自分たち自身である」と。そのように推測できる理由もある。たとえば、あるメンバーは、別の事故の関係者（被害者や加害企業）の心情に思いを馳せつつ、「今までは、こんな事故があっかわいそうだな、だけだった」（p.144）と語っている。無関心だったのは、自分の方だったというわけだ。

また、本書には、「空色の会」と日航機墜落事故や信楽高原鉄道事故など、福知山線事故よりも前に発生した事故の遺族、関係者等との交流が描かれている。この交流は、一義的には、類似の立場に置かれてしまった人びと（言いかえれば、同じクラスターの内側として線引きされた人びと）同士が励まし合い、セルフヘルプや相互支援、加害企業との関わり方などについて、実際的な経験やノウハウを学ぶための場であったであろう。しかし、それと並んで、「空色の会」のメンバーが、今これほど近接してい

る人たちが、かつては自分たちから無限の距離にあったという事実に直面したことが重要ではないか。このように評者は考える。福知山線事故より「前」に起きた事故の当事者との関わりは、「空色の会」のメンバーに、自らが——事故の当事者になる以前には——それらの事故にほとんど注意を払っていなかったことを想起させずにはおかないだろう。つまり、今の近接より、かつての遠隔の方に意味があるのだ。しかも、それは、決して悲観すべきことではない。その関係をそのままスライドさせれば、同じ事実が、今、自分たちと無限の遠隔へと引き裂かれているようにも見える尼崎駅での「あの人びと」が、実際には近くにいるかもしれないことを示唆するからである。

4. そして、加害企業へ

4.1. 最も遠いからこそ——「少人数の語らいの場」

「線引き」は、一見すると、考えうる限り最も遠く隔てられているように見える人びと同士、あるいは、まるっきり異質で対立的で、何ら共通性を見いだせないように見える人びと同士を、隔絶すると同時に密着させ、また差異化すると同時に同一化する力を有しているのだった。このロジックの極点に当然浮かびあがってくるのが、(遺族や) 本書に登場する「空色の会」(負傷者やその家族) と、加害企業つまりJR西日本の関係者との関係にも同じメカニズムが働く場合があるのではないか、という推定である。

もちろん、両者の間には、きわめて鮮明な「線引き」があり、両者の距離はきわめて大きい。両者の確執を示す記述には事欠かない。事故後まもなく病室に見舞金を持参されたときの戸惑い(p.38)、示談交渉をめぐる不信任感(p.52)、「情報漏洩問題」という裏切りへの反発(p.58)……。事故後十年以上が経過し、加害企業の努力に一目も二目も置くメンバーですら「ある意味、許せない部分がある」(p.140)と吐露する現状は重い。しかし同時に、この水と油とも映る両者が、意外にも近接して、ときに反転・互換さえする(あるいは、すでにしているかもしれない)ことを示唆するヒントが本書にはいくつか示されている。この点は、本書のテーマである「対話」、「媒介」へと通じる重要な回路であり(詳しくは5節)、評者が本書に見いだした最も大きな学び、しかも前向きな学びでもある。

両者の反転・互換可能性、言いかえれば、両者間

の「線引き」が絶対ではないかもしれないことを、本書に記載された2つの系統の情報をもとに指摘できる。少なくとも評者は、そのように本書を読んだ。第1は、筆者(八木氏)のアクションリサーチの中核に据えられている「少人数の語らいの場」(以下、「少人数の場」)で起きた出来事である。「少人数の場」は、事故現場の整備方法について遺族や負傷者、その家族が、JR西日本の社員とともに「膝詰めで語り合う試み」(p.195)である。八木氏は、JR西日本より2013年にコンタクトを受け、当初からこの場の設定・設計・運営に関わっていて、負傷者とその家族が参加する場では、当日の進行役も務めている。周知の通り、この件は、最終的には、2018年に完工した現在の様子へと収斂していくことになるが、そこまでの道のりは多難を極めた。「初回の躓き」(p.197)、「加害企業が場をつくることの難しさ」(p.198)、「叱責の声」(p.208)など、本書の該当箇所に掲げられた小見出しを並べてみるだけでもそれはわかる。その困難な道のりの詳細や筆者(八木氏)による工夫の数々は、筆者の専門領域(対話や熟議に基づく科学・技術コミュニケーション)に直接関わる重要なものであり、本書を直接あたってほしい。

ここではあえて、こうした「少人数の場」の正面玄関にある論点ではなく、ある意味で舞台裏とも思えるエピソードに注目しておきたい。そこで主役となるのは、事故後にJR西日本に入社した社員と負傷者(その家族)とのやりとりである(p.210-212)。こうした社員は、当初、「少人数の場」の裏方として会場整理的な役割を担い、対話の場には陪席しなかった。が、「せっかくの機会なので、若い社員の方にも『生の』声を聞いてほしい」(p.210)との要望が負傷者家族側から出され、その場に同席することになった。加えて、八木氏の発案で、陪席した若手社員も感想を述べることになった。評者は、この工夫こそ八木氏の卓越した実践感覚のなせる技だと感じた。八木氏は「進行役の権限でこれだけは私の希望を聞いて下さいね」(p.210)としてこの仕組みを導入しているので、相当の思い入れと一定の戦略的見通しをもってそう提案したはずである。

若手社員は、次のように語る。(事故が起きたのは)「最終面接を控えた二日前だった…(中略)…自分たちの世代がぎりぎり、JR西日本の社員として事故の日を迎えた最後の世代になるとも感じている」(p.211)、「このようなことを申し上げては、ご不

快に感じられる方もいらっしゃるかもしれませんが…（中略）…採用面接の際に、先輩社員が質問されなくても福知山線の事故についてふれ、JR西日本という会社が安全のために何をしなければならないかと熱心に語っている姿を見て、この会社で鉄道事業にかかわりたいと思った」（p.211-212）。そして、「若手とも言える社員からの感想は、負傷者やその家族にとっても新鮮にうつるようである。そして、若手社員が自らの経験を含めて語る姿は、管理職が丁寧に説明する言葉より、ある意味で好意的に受け止められている」（p.212）。

なぜそうなるか、想像してみることは容易である。もちろんベテラン社員が不誠実だということはないだろう。しかし、長年の事故担当社員のコメントは、どうしても「模範解答的な感想」（p.211）になる。受け答えの内容というよりも、対話におけるポジションがそうなのだ。遺族、負傷者（その家族）に最大限の配慮を示すその姿勢が、加害企業の社員との間の「線引き」を強化していく。お互いを不可侵で近寄り難いものにしていく。「みなさまは冒しがたい存在です」というリスクは、裏を返せば、そちら側には一歩たりとも踏み込みませんという態度である。それに対して、若手社員の言葉には、両者の「線引き」を微妙に横断するニュアンスがある。もともと、みなさんと同様、JR西日本の外側にいた私たちは、斯く斯く然々な思いと経緯から、「今はこうして、みなさんから見てあちら側に立っています」。そのような「線引き」の相対化への萌芽のようなものが、若手社員の言葉には隠れている。

この推定は、「会社に誇りを持ってやってほしい、社員が謝るだけでは、見ていてつらい」（p.212）という、ある負傷者の声によっても裏打ちされる。被害者はだれしも、（お金ではない）謝ってほしい、まず真摯に謝罪してほしい。そう思っている。しかし、その謝罪が、「線引き」の壁を分厚くする方向にのみ作用するのを識らされる時、被害者の感情に、ある種の反転が起きる。叱責と謝罪の声が一方通行で行き交うのみで、その不毛が極点に達したとき、言いかえれば、「線引き」による分離・反目が限界に達したとき、最も遠隔に位置していると断ぜざるを得ない対象においてすら微かに見え隠れする連帯・融合へ向けた芽が、逆に生き生きとした形で見えてくる。

4.2. 「同志」として

負傷者（その家族）とJR西日本の社員との間の「線引き」が、よき意味で解消されうることを示す第2の

観点は、「事故検証は、専門的検討と被害者視点の交点を見つけていくプロセスを通じて、被害者が人生の再出発の入り口に立つためのものと言うこともできる」（p.149）という筆者の適切な見立てとして集約されている。評者として注目したいのが、このプロセスのスタート点に、遺族や負傷者（その家族）たちの「大切な人の（最後の）乗車位置を確認したい」という切実な思いがあるという事実である。「遺族はこだわる。なぜ、自分の大切な人が、この場所で事故にあってしまったのだろうか。そして、その事故を防ぎ得たかもしれないありとあらゆる可能性に思いを巡らせる」（p.138；傍点は原著者）。被害者が、大切な人の最後の場所、最後の声を求めてやまない思いはだれにでも理解できる。この切なる希望を叶えようとする試みやそれを支援する活動は、世に多数存在する。特に、現場が凄惨を極めたJR福知山線事故では、その希望をかなえることが困難であった。だからこそ、その思いはかえって強まった。「私は娘が最期に座っていた同じ座席に座ってあげたいんです。最後に握っていたであろうつり革につかまってあげたいんです」（p.132）。

ここでは、2つのことが重要である。第1に、この強烈な追体験願望、現場再現欲求の背後には、亡くなった家族への哀切な感情とともに、亡くなった人が紙一重で亡くならずに済んだかもしれない可能性、つまり、「線引き」の死ではなく生のサイドに、負傷ではなく無難のサイドに来ていた微かな可能性を探りたい、との痛切な思いがある。さらに、できることなら、今から時を巻き戻して、その直前——「もう」が「まだ」だったあの時——へと大切な人と一緒にたち戻って、「線引き」のこちら側へとスイッチさせたい。遺族や被害者はこの思いを押しとどめることができない。その瞬間を再現し追体験することは、遺族や被害者にとって、本来もつとも辛いことであるはずなのに、それにもかかわらず、それは抑えきれない欲求として湧き出てくる（この点については、フラッシュバックという現象と関連づけて、矢守（2016）などで何度か論じた）。

第2に、亡くなった近い人を「線引き」のこちら側へと引き戻そうとする遺族や負傷者（その家族）の激烈な情熱——筆者八木氏が言う「事故に向かい合うエネルギー」に相当——は、「サバイバルファクター」（p.134）と呼ばれる活動を中間に挟んで、いわゆる事故の原因究明・再発防止に関する（加害企業や専門家による）活動へと連なるという点が、きわめて重要である。サバイバルファクターとは、

煎じ詰めれば、事故等の被害者が自ら、事故の再発防止策、また被害の拡大抑止策の検討作業に参画することをエッセンスとする仕組みである。紙一重の「線引き」のこちらとあちらを見きわめようとする被害者のエネルギー、それは、座席一つ分の違い、つり革一つ分の違いの細部にすら向かう。この同じエネルギーは、列車の時速1キロ分の違い、車両剛体の厚さの1ミリの違いへも向けられてしかるべきである。言うまでもなく、これは、本来、「事故調査委員会」に要請されるミッションそのものである。生死を分けた「線引き」以前に、事故発生の有無を分けた数々の「線引き」を解きほぐし、十分にあり得たはずなのに実現されることなく終わった無事故へと至る因果パスを同定し、それを未来永劫実現させ続けるための知恵を生み出すことが、事故調査委員会の役割だからだ。

もちろん、事故検証には、訴訟や責任問題が付きまとい、両者を分裂・離反させる方向に働く力も強い。しかしながら、上で見てきたように、「事故の検証に携わる専門家も、加害企業の側で安全業務に携わる社員も、そして被害者も、『もう二度とあのような事故は起こさない、起こしてほしくない』と決意し、そして願いつづけているという意味では、『同志』と呼べる関係性にもある」(p.153-154)。遺族や負傷者の家族と加害企業を一体化させるための、微かだがたしかな回路がそこには潜在している。上で引用した筆者の言葉を再度借りて敷衍するならば、被害者の人生の再出発のための乗車位置特定の試みが、加害企業の再出発のための事故原因の究明へと直結し、同時に、加害企業の再出発のための事故原因の検証活動が、被害者の人生の再出発へと直結する。

5. 「媒介の専門家」によるアクションリサーチ

5.1. 「2.5人称」論の限界

1節で述べたように、本書のまとめにあたる最終章は「媒介の専門家であるということ」と題されている。そして、最終章を構成する2つの節の表題は、「対話の場をつくる実践者に必要なこと」、および、「『2.5人称の視点』をもつ専門家として」である。つまり、筆者(八木氏)が本書を締めくくるにあたって依拠したキーワードは、柳田邦男氏がかねてから提唱している「2.5人称の視点」である。率直に言って、評者は、このコンセプトに大筋賛同しつつも、不満ももっている。ジャーナリズム由来で耳障りは

いいが、「事態の本質をぐさりと抉る鋭い洞察をもたらす概念か」と思考のギアを一段深く入れて問い詰めてみると、遺憾ながらそうではなくて、そこには、いささか粗雑で精度のゆるさを感じる部分が残されている。また、ここまで、本書の成果に無条件に賛意を示してきたため、全面礼賛では書評のつとめを果たせない憾みもある。「2.5人称の視点」についてだけは若干クリティカルに見つめ直してみたい。

柳田氏の「2.5人称」論はよく知られているので、本書(p.127-128)の記述をそのまま借用して、簡単に紹介するにとどめておく。なお、柳田(2004; 2005)など、本人の著作をあたっても、同様の説明がなされていることはすぐに確認できる。柳田氏はこう主張する。事故調査を行う上で、「もし自分が事故にあっていたら」と考えるのは1人称の視点、「もし自分の家族や大切な人が事故にあっていたら」と考えるのは2人称の視点、専門的な知識だけに基づいて判断するのは3人称の視点。そして、1人称、2人称の視点を入れつつ、専門家として冷静に判断するのが「2.5人称」の視点である、と。

結論を先に述べれば、「2.5人称の視点」に対する評者の違和感は、この概念がきわめてスタティック(静的)な印象を与える点にある。その意味を、発達心理学の泰斗佐伯胖氏による「人称アプローチ」の議論(佐伯, 2018)をベースに明らかにしておこう。柳田氏のターミノロジーほど世間には知られていないようだが、佐伯(2018)も、レディ(2008)の研究を下敷きに、「人称」をキーワードにして(発達)心理学の研究アプローチについて論じている。具体的には、「1人称」と「3人称」のアプローチを区別した後、「2人称アプローチ」の重要性を指摘している。

若干長くなるが、その骨子を佐伯(2018, p.21)から引用しておこう。

- ・「1人称的アプローチ」：対象を自分(1人称)と同じ存在であるとみなし、自分自身への内観をそのまま対象にあてはめて類推する。
- ・「3人称的アプローチ」：対象を自分と切り離し、個人的関係のないものとして、傍観者的に観察し、「客観的法則」ないし「理論」を適用して解釈する。
- ・「2人称的アプローチ」：対象を自分と切り離さないで個人的関係にあるものとして、情感をもってかかわり、対象の情感を感じ取りつつ、対

象の訴え・呼びかけに「応える」ことに専念する。

佐伯の概念設定は、柳田のそれよりも明らかに勝っているように思われる。なぜなら、研究者(自分)と対象と知識との関係性を表現するコンセプトとして明確に整理されているからである。より具体的には、人間活動に関する知識(事故調査から生まれる知識もその一つ)は、知識の対象となる人間活動を営む人びとに対して、知識を生み出す人びとがとる関係性によって大きく異なる、という本質が明示的に表現されているからである。佐伯によれば、人間活動に関する知識は、否応なく、それを生み出すための研究という人間活動(その内部における人称的な関係性)と相関してしまう。人間活動に関する知識は、その活動を営む具体的な対象(人びと)をそこに置いて、対象に働きかけ、逆に対象から働きかけられること、この「応え、応えられ」関係を前提にした場合と、「応え、応えられ」関係を欠落させた場合とでは、まったく異なるものになる。これを象徴的に例示するための事例として、発達心理学者でもあるレディが、自分自身の赤ちゃんを観察した途端——言いかえれば、「応え、応えられ」を前提にせざるを得ない「2人称的アプローチ」で観察した途端——、これまでの、(親子の)「応え、応えられ」を前提にしない「3人称的アプローチ」によって見いだされた発達心理学の定番的知見のいくつかガラガラと音を立てて崩れ去ったというエピソードが紹介されている。

なお、ここで、佐伯(2018)による「2人称的アプローチ」は、素朴な「1人称論的アプローチ」の否定の上に立って提案されていることもおさえておきたい。素朴な「1人称論的アプローチ」とは、上の「内観」、「あてはめ」という用語に表れているように、まず、「1人称(自己:わたし)」が自明に存在していることを認めておいて、しかる後に、「内観」(自己に関する自己分析の結果)を「2人称(他者:あなた)」へと「あてはめ」る、という考え方である。それに対して、「応え、応えられ」関係に立脚する「2人称的アプローチ」は、「1人称(自己:わたし)」と「2人称(他者:あなた)」の等根源性を前提にしている。佐伯が、「『自己』は、自分自身の内観世界に閉じこもる自己ではなく、他者のさまざまな生き様に即して、他者に『なってみる』ことのできる自己である」(佐伯, 2018, p.29)と語るとき、「1人称」と「2人称」は、互いに独立して、かつ「1、

2」の順番で成立するものではなく、互いに「なってみる」ことのできる、言いかえれば、相互に互換する関係にある存在として定位されている。その意味では、レディと佐伯の概念立ては、「素朴な1人称的アプローチ」、「3人称的アプローチ」(客観的、非属人的という特徴に鑑みて、「非人称的」あるいは「無人称的」と呼ぶ方がベターかもしれない)、「(1人称と互換可能な)2人称的アプローチ」、と整理すべきものとも言えよう。

以上に見た、佐伯による、言ってみれば「人称依存的知識生成論」——アクションリサーチにおける共同当事者による共同的な知識生成論(矢守, 2018b)——と比較すると、柳田の「2.5人称論」は、誤った方向を向いているわけではないが、全体の一部をカバーしているに過ぎないとの印象を与える。すなわち、何らかの突発的な事故・災害を念頭に、「もし…」という反実仮想ストーリーを想定しておいて、ストーリーの犠牲者のポジションに「自分自身」、「自分にとって大切な人(たち)」、「無関係な人」という3つのタイプを代入した場合を想定してみよ、と勧めているに過ぎず、研究方法論としては論理性や包括性において、いささか物足りないと言わざるを得ない。

5.2. 媒介の専門家

残された課題は、上記の「人称依存的知識生成論」にあって、研究者(アクションリサーチャー)は、どういう位置を占めるのかということ、すなわち、筆者(八木氏)の言う「媒介の専門家」は、どこにいて、どのような役割を果たすべきか、である。この点に徴しても、「2.5人称」というメタファーは、若干ミスリーディングだと評者は感じる。それは、「2.5人称」というワードが、「1人称」、「2人称」(事故の当事者)でもない、「3人称」(客観的第三者)でもない立場や視点がスタティックにそこにある、との印象を与えるからだ。実際、柳田氏自身、「乾いた3人称の視点から潤いある2.5人称の視点へ」(柳田, 2004)というフレーズと好んで使う。

しかし、評者の見立ては異なる。むしろ、大切なのは、対象に対して徹底的に非関与的な視点(佐伯の言う「3人称的アプローチ」から生まれる知識を確保する拠点)と、対象に対して徹底的に関与的な視点(佐伯の言う「(1人称と互換可能な)2人称的アプローチ」から生まれる知識を確保する拠点)、この両視点・両拠点を、純粋に混じり物なく、できるだけ異質なものをとって確保し、それら下手をすれば破綻・分解を招きかねない二つのまったく異なる

タイプの知識の間を「媒介」し続けるダイナミックな運動を実現することが大切である。裏を返せば、両翼の中間に、都合よく、中程度に関与的で中程度に非関与的な「潤いのある」視点は存在しないか、存在したとしても、それは、中途半端な虻蜂取らずに終わるだろう。別言すれば、3人称的アプローチとしては切れ味のない知識、あるいは、2人称的アプローチとしては迫力のない知識を生むだけに終わるのではないか。

もちろん、評者が重視する両極点の往復運動戦略は、空中分解の危険をはらんでいる。しかし他方で、勝算もある。往復運動のダイナミズムを強力にバックアップするメカニズムが存在するからである。それこそが、4節で縷々述べたこと、つまり、「線引き」の両極点に布置している人びと同士が、反転・互換する可能性である。「空色の会」の視点から見た〈負傷者（1・2人称）対加害企業（3人称）〉の構図と、JR西日本の視点から見た〈加害企業（1・2人称）対負傷者（3人称）〉の構図とは、けっして完全に硬直した永劫不変なものではなく、その間の「線引き」が強烈に鮮明であるだけに、逆説的に、容易に反転・互換する潜在性を秘めているのだった。

ここまで論じてくれば、「媒介の専門家」の役割は、もう明瞭である。上述の往復運動のダイナミズムを駆動し、維持し続ける役割である。筆者（八木氏）は、本書の冒頭部分で、「空色の会」のメンバーから最初にアプローチされたときのことを、こう振り返っている。「事故にかかわるさまざまなステークホルダーによる対話の場の形成というメタ的視点における支援であると認識している。そのため、『もしかすると皆さんのお役には立てないかもしれませんが、いいのですか…』」（p.17-18）。これは謙遜というものだろう。本書を読めば、八木氏が、負傷者（その家族）にとって、時に「1・2人称」で、時に「3人称」で、多角的に分厚く関与していたことは明瞭である。

同時に、筆者（八木氏）は、「筆者が直接的に関わりをもつ被害者は、負傷者とその家族である。特に本書で記述する加害企業社員の振る舞いや心情に関する記述は、負傷者とその家族と、加害企業社員との対話を通じて見えてきたものである」（p.239）と、自らの加害企業との関与性には限界があることをわざわざ注記している。他方で、先述の「少人数の場」についてJR西日本から計画段階でコンタクトを受けたこと（p.195、4節(1)項で先述）、福島原発

事故の後、東京電力の関係者とJR西日本の関係者との意見交換の場をセットしたこと（p.231）も明記している。さらに、「負傷者やその家族は、自らの人生を根底から変えてしまうような事故と、そこからの出来事や心情を、何とかふさわしい言葉で語ろうと、伝えようとする。そして、決して大きな声で語られることはないが、自らが所属する企業が起こした事故に真摯に向き会おうとする加害企業の一般社員にも、それに通じる営みは存在する」（p.232）と記す。広く公刊される書籍——当然、「空色の会」のメンバーも、遺族も、加害企業の社員も読むことができる——で、こう明言できること自体、八木氏が、負傷者（その家族）だけでなく、加害企業に対しても、時に「1・2人称」で、時に「3人称」で、多角的に分厚く関与していたことを示唆していると思う。

八木氏の言うメタ的な視点が、素朴な「2.5人称」の視点とは異なること、まして、高みから事態を傍観（客観的に分析）する視点とも異なることは、本レビューでその一端を眺めてきたように、筆者の苦闘の跡から明らかである。筆者（八木氏）は、負傷者たちの「空色の会」にあって、時に「1・2人称」の人物としてメンバーとともにあり、しかし別の時には「3人称」の人物として表れた。同時に、筆者は、JR西日本の社員に対しても、時に「1・2人称」の人物として登場し、しかし別の時には「3人称」の人物としても関係してきたように見える。「媒介の専門家」として、八木氏が多様な関係者クラスターの「すべて」と密接かつ真摯に関与する姿勢（1節）を貫いたのは、この特殊な人称的関わりを保持するためだったのである。

参考文献

- 千々和詩織・矢守克也（2020）．長期的な視点に立った学校防災教育の実施と検証に関する試論 災害情報, 18, 25-34.
- 船木伸江・矢守克也（準備中）．もうひとつの被災：大災害の当日生まれの青年の苦しみと回復過程
- 笠原一人・寺田匡宏（2009）．記憶表現論 昭和堂
- 加藤典洋（2015）．敗戦後論 ちくま学芸文庫
- 大澤真幸（2018）．責任論：自由な社会の倫理的根拠として 大澤真幸 自由という牢獄：責任・公共性・資本主義 (pp.65-140) 岩波現代文庫
- レディ, V. 佐伯胖（訳）（2015）．驚くべき乳幼児の世界：「二人称的アプローチ」から見えてくること ミネル

矢守：八木絵香（著）『続・対話の場をデザインする』

ヴァ書房

(Reddy, V. (2008). *How Infants Know Minds*. Harvard University Press.)

佐伯胖（2018）．リフレクション（実践の振り返り）を考える 佐伯胖・刑部育子・苺宿俊文 ビデオによるリフレクション入門（pp.1-37） 東京大学出版会

東京都人権センター（2011）．特集「震災と人権」 TOKYO 人権, 51, 6-7.

富山一郎（2006）．増補：戦場の記憶 日本経済評論社

矢守克也（2016）．喪失とトラウマ 災害情報学会（編）災害情報学事典（pp.312-313） 朝倉書店

矢守克也（2018a）．〈Days-Before〉：「もう」を「まだ」として 矢守克也 アクションリサーチ・イン・アクション：共同当事者・時間・データ（pp.97-121） 新曜社

矢守克也（2018b）．アクションリサーチとリサーチ・イン・アクション 矢守克也 アクションリサーチ・イン・アクション：共同当事者・時間・データ（pp.3-23） 新曜社

矢守克也・杉山高志（2016）．「わたしに語る資格があるのでしょうか？」 災害復興, 15, 29-31.

柳田邦男（2004）．医療と「2.5人称の視点」 日本臨床外科学会雑誌, 65(supplement), 185. Retrieved from http://www.jstage.jst.go.jp/article/ringe1998/65/supplement/65_supplement_185/_pdf/-char/ja

(2020-09-13)

柳田邦男（2005）．言葉の力、生きる力 新潮文庫